（写真左より）
株式会社飯塚製作所
代表取締役副社長　飯塚 智 様
株式会社ＮＣネットワーク
代表取締役　内原 康雄
株式会社ヒューテック
代表取締役 藤原 多喜夫 様
プロジェクトリーダー
近兼 拓史 監督
株式会社ライン精工
取締役社長　長瀬 徹 様
日進工具株式会社
代表取締役社長　後藤 弘治 様
株式会社C&Gシステムズ
代表取締役社長　塩田 聖一 様
安田工業株式会社
経営管理部長　妹尾 常夫 様

日本の精密技術で世界最高速を目指す

2019 50cc&125cc Bonneville World Record Challenge

応援プロジェクトへの参加はこちらから!
www.makuake.com/project/smcbonnevillejapan/

50ccエンジンによる世界最高速記録233.3km/h――。2008年8月、アプリリア2ストロークターボが記録を樹立して以来10年以上誰にも破られていない大記録。その記録に日本の精密技術の粋を結集して挑戦しようというのがSMC（スーパーミニマムチャレンジ）プロジェクトだ。

舞台は、見渡す限り純白な塩の平原が広がるアメリカ・ボンネビルソルトフラッツ。ここで100年以上に渡って行われている、世界で最も歴史と権威ある最高速度競技会（ランドスピードレーシング）、それがBMST（ボンネビル・モーターサイクルスピードトライアルズ）だ。世界最速の称号を求めて世界中から集う各国のチャンピオン達。得るものは、キングオブキングスのプライドと、世界最速の称号だけ。名誉とプライド以外何もいらない！1ドルの賞金も出ないという高潔さが、世界中の男たちを燃え上がらせる。

世界を驚かせたオレンジの小さなマシン

昨年、BMST100年の歴史の中でエポックメーキングな出来事が起こった。競技を主催統括するFIM（国際モーターサイクリズム連盟）AMA（アメリカモーターサイクル協会）のメンバーが目を見張ったのは、1台の日本から来た小さなオレンジのマシンNSX-01に対してだ。

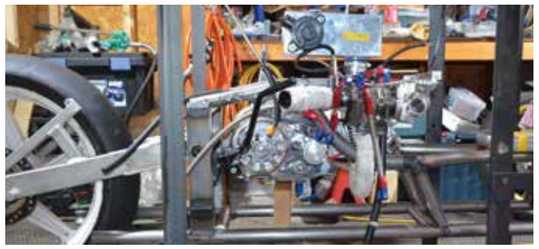
通常モータースポーツで記録を狙うなら、そのクラスで最もパワフルでポテンシャルの高いエンジンを選ぶ。しかし「スーパーミニマムチャレンジ」チームが持ち込んだマシンのエンジンは、レースからほど遠い実用車、スーパーカブをベースにしたものだった。

60年以上にわたり製造され、世界中で1億台以上が販売されている、地球上で最も愛されているオートバイ。それがスーパーカブだ。しかし、その1億台のユーザーなかで、本気でボンネビルで世界最速に挑もうとする者は一人もいなかった。

BMSTの車検場では、ベースマシンがノーマルなら60km/h程しか出ないスーパーカブだと聞いて、「ジョークかシャレにしては作りこんだマシンだ」と競技関係者の誰もがSMCを本気のチャレンジだとは思わなかった。しかし、競技が開始されると周囲の目は一変する。

「55マイル（88.5km/h）でればいいところじゃないのか」と見られていたNSX-01は、最初から100km/hをオーバーを記録し、110 km/h、120 km/h、130 km/hと、走る度に記録を更新していく。標高1,200m以上、日中の気温は摂氏50度に迫るという過酷な自然環境の中、当初220台が参加していたレースは、1台また1台と転倒や、マシントラブルでリタイヤし、競技3日目には50台以下にまで減っている。そんな中、NSX-01はノートラブルで走り続けている。

「さすがメイドインジャパン！」「精密機械がなぜ壊れない！」驚きの声は日増しに高まっていった。



NSX-01をマスコットバイクかジョークバイクだと思っていた競技関係者が、いつの間にかSMCチームを真剣に応援し始めていた。「GO！スーパースーパーカブ！」「エクセレント！オレンジツナ」。会場に流れるFMラジオからは、NSX-01が走る度、DJが自己記録更新を伝え、あちこちで歓声があがる。

NSX-01は、最終的に瞬間最高速度165.3km/h、1マイル平均速度153.73km/hを記録し、世界最速のスーパーカブの称号を得、昨年のチャレンジを終えた。

日本の精密技術が20年越しの夢を実現させた

このチャレンジの実現には、何人かの男たちの熱い思いがあった。2016年全国劇場公開された、日本のモノづくりを描いた映画「切り子の詩」。その監督を務める近兼拓史は元レーサーだった。かつてボンネビルを目指しマシンを作っている最中に、阪神淡路大震災で被災。自宅、実家、事務所の全てを全壊で失うこととなった。

スポンサーは、そんな彼の背中を押してくれたが、崩れ落ちた故郷の姿を前に、自分の夢を追う気にはなれず地元の復興に奔走する。20年の時を経て映画監督として才能を開花させた近兼は、切り子の詩の撮影を通じ、日本の精密加工技術の素晴らしさとレベルの高さを実感する。

そして「今の日本の精密加工技術があれば世界最速のマシンを作れるのでは」と、忘れようとしていた夢を再燃させる。

最初に賛同したのは日進工具の後藤弘治社長だった。「日本の精密技術で世界最速を目指す」。これは精密加工技術で日本の製造業を応援する、日進工具の思いとピッタリ重なった。そこから、アッという間に腕自慢技術自慢の30数社の協賛企業が集まりSMCプロジェクトがスタートした。「日本の精密技術の素晴らしさを世界に伝える」という思いは、今年の夏、確実に結実しつつある。

SMCチームは現在、今年8月のボンネビル本番に向けて、NSX-02（123cc）とNSX-51（49cc）という2台のマシンを制作中だ。そして、昨年の教訓を活かし、高標高、高気温によるパワーダウンに対応するため、スーパーカブエンジンをベースに、NSX-02は、インジェクション+インタークーラーターボ。NSX-51は、インジェクション+スーパーチャージャーという、究極の極小エンジンに改造中だ。

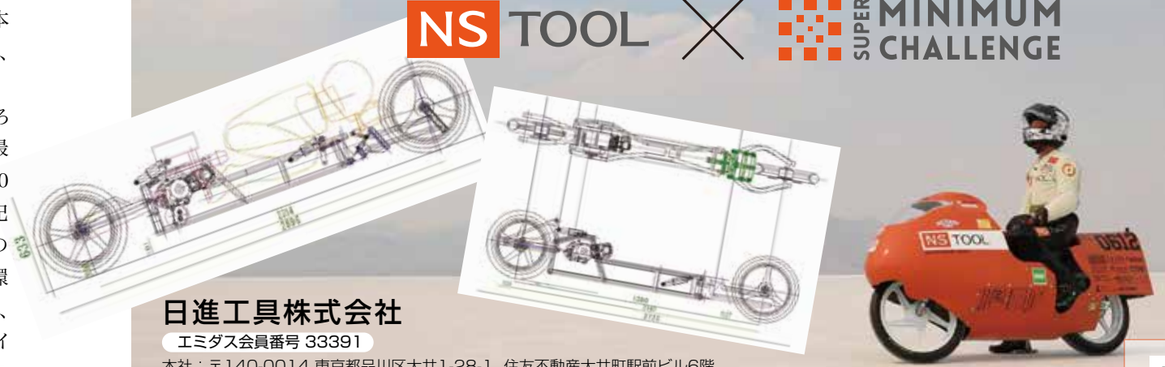
新設計のインジェクション&マッピング。新設計のローコンプレッションピストン。世界で例を見ない小排気量の過給機付きレーシングエンジンが世界中で話題となることは疑いようがない。

50ccノーマルで3.7PSのスーパーカブエンジンは、既に12PS/13,500rpmを突破。目指すホンダワークスの50ccレーサー、RC116の持つ4st50ccの世界最高出力記録14PS/21,500rpm更新も視界に入ってきた。前面投影面積の軽減や空力特性のアップによる空気抵抗の低減も加わり、RC116の持つ175km/h以上という速度記録を破り200km/hオーバーを記録するのは、もはや夢じゃない。誰もが知る街中で普通に見かけるスーパーカブ。そのエンジンをベースに200km/hオーバーを達成すれば、世界が日本の精密技術の素晴らしさに驚くに違いない。

パワーの出やすい2ストロークエンジンベースではなく、最初からパワーの出ているスーパースポーツエンジンではなく、普通の実用車であるスーパーカブのエンジンをベースに世界最速記録に挑む。このチャレンジが、世界中の人々に日本のモノづくりのすばらしさを伝えてくれるに違いない。同プロジェクトは本番に向け、まだまだ支援企業、支援者を求めている。日本のモノづくりのすばらしさを世界に伝える。一人でも多くの皆さんに参加いただきたい！そう心から思えるプロジェクトだ。

協賛企業（五十音順）
株式会社飯塚製作所（奈良県）、株式会社キャステム（広島県）、株式会社C&Gシステムズ（東京都）、日進工具株式会社（東京都）、株式会社ヒューテック（大阪府）、HILLTOP株式会社（京都府）、株式会社マルマエ（鹿児島県）、株式会社みづほ合成工業所（愛知県）、安田工業株式会社（岡山県）、吉田工業 株式会社（長野県）、株式会社ライン精工（岐阜県）

NS TOOL × SUPER MINIMUM CHALLENGE



日進工具株式会社
エミダス会員番号 33391
本社：〒140-0014 東京都品川区大井1-28-1　住友不動産大井町駅前ビル6階
TEL：03-3774-2459
SMC HP：https://www.ns-tool.com/ja/for_crafting_tomorrow/smc/

一緒に応援して、レースの醍醐味をわかちあおう! →

SMC